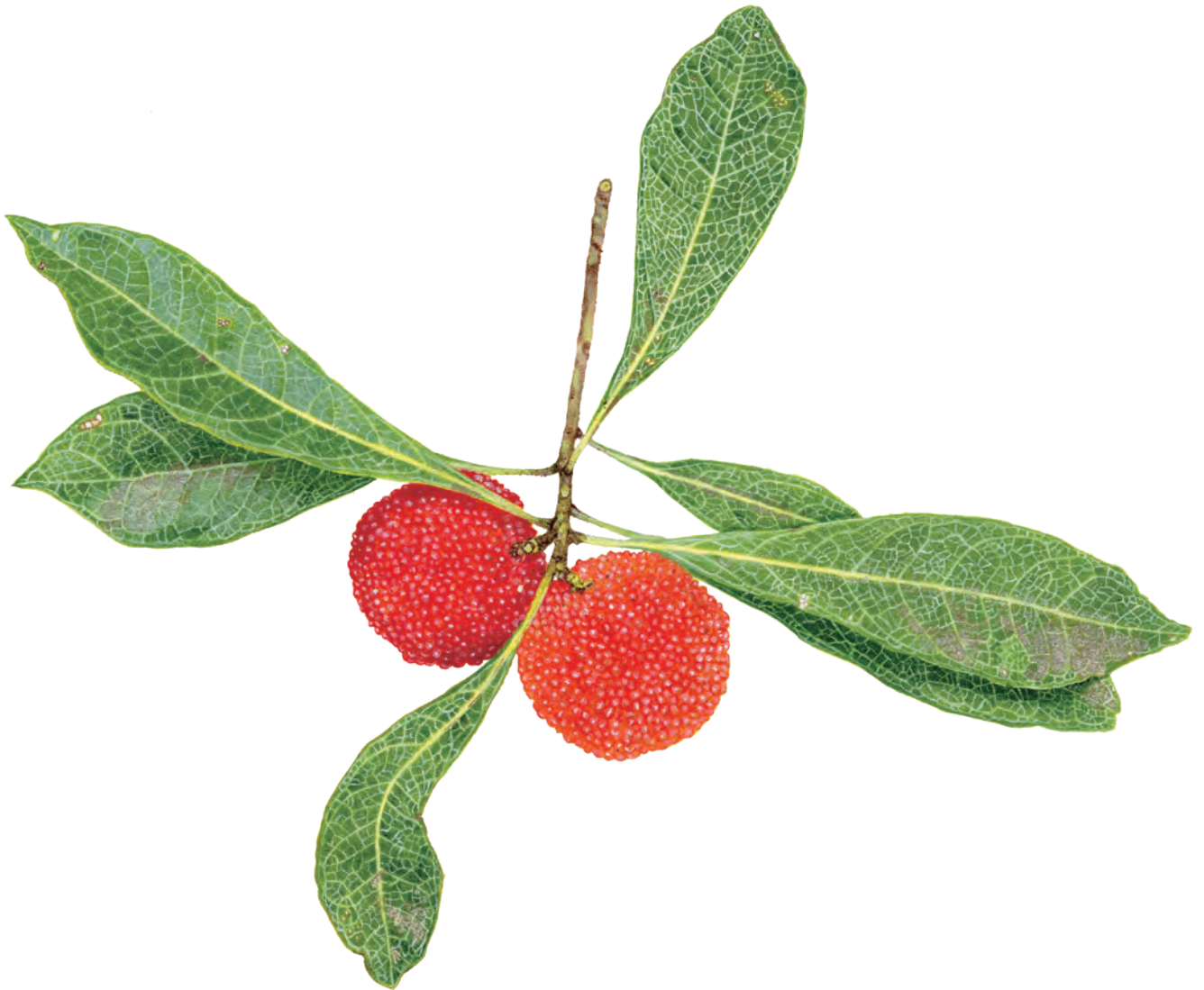


YAMATO Nature Circle



2026年9月

葉画家・群馬直美のヤマトビオトープ園の葉っぱたち Vol.91

—— 絵と文 群馬直美 ——

いのちの惑星《ヤマモモ》

六月半ばすぎのヤマトビオトープ園散歩。

みどり色濃くなった葉っぱたちの間から、赤い実をたわわにつけた木が見えた。

まるでカーニバルをしているみたいに華やいている。

「なんだろう、あの木は！」吸い寄せられるように近づくと……ヤマモモだった。

ピンポン玉くらいの大きさの赤い実が、枝先に五個も六個もまとまってついている。

地面にもたくさんの熟した実がびっしり落ちている。ビオトープ園散歩11年目にして、ヤマモモの木が実をつけた。

立川のアトリエの机の上で、ヤマモモの実をいろいろ動かし、どの角度から見て描くかを決める。

これまで描いたモデルの植物たちはカラカラに干からび腐ることはなかったけれど、ヤマモモの実は足が早そう。

急いで資料写真を撮り、実物はシャーレに入れて制作開始。

16日後の朝、いつものようにアトリエにやってくると、

作業机の上に40～50匹ものショウジョウバエが群がり飛んでいた。

窓を開け追い払うと出て行ったが、翌日も30匹ものハエが発生。

怖くなってシャーレの中で腐敗していたヤマモモの実を地面に戻し、

AIに原因を聞いてみると、『ヤマモモの球果の粒々の隙間にハエが卵を産みつけ、

角度を変えながら見ているうちに机の上に極小の卵が塊でこぼれ落ち、ひっそりと育ちきった』とのこと。

「地球温暖化が進み、地中ではミミズは消え失せセミの幼虫は干からび、微生物も激減している」

と桜守りの知人が話していたけど、ヤマモモの実はじつに豊かないのちの惑星だった。

《表紙の絵》ヤマモモの実

「左右で微妙に違う赤の色合い」

・ヤマトビオトープ園にて2026年6月22日採集

(作品の完成日は、2026年7月15日)

・紙(ファブリアーノ エキストラホワイト極細目)/テンペラ

・size:335mm×245mm

©Naomi Gumma

群馬直美 GUMMA NAOMI プロフィール

高崎市生まれ。1982年、東京造形大学絵画科卒業。在学中に新緑の美しさ、その生命力に深く癒された経験から、“葉っぱ”をテーマとする創作活動に入る。「葉っぱの精神—この世の中の一つ一つのものは全て同じ価値があり光り輝く存在である」に則り、1991年テンペラで克明に描く現在の作風に至る。2006年より世田谷美術館「美術大学」で葉画講師として身近な葉の美しさ、素晴らしさを伝え続けている。2019年、『下仁田ネギの一生』の組み作品で、英国王立園芸協会主催植物画展で金賞及び最高賞受賞。著書に『言の葉 葉っぱ暦』『群馬直美の木の葉と木の実の美術館』『葉っぱ描命』『Dancing Vegetables 踊る野菜』他。東京都立川市在住。
<https://www.wood.jp/konoha/>